

所 属	文化振興課
所属長	荻田 昭憲
電 話	06-6489-6385

## 伝統の地 大物川緑地野外能舞台で 2年ぶりに「尼崎薪能」を開催！

本市では、昭和55年から、大物川緑地野外能舞台において「尼崎薪能」が開催されており、能楽「船弁慶」ゆかりの地として親しまれています。

昨年は尼崎城の野外特設舞台にて開催いたしましたが、今年は伝統の地に戻って開催します。

能楽「花月（かげつ）」の上演の他、尼崎こども能楽教室で日々練習に励む地域の子どもたちも出演します。この機会にみなさまぜひ、幽玄の世界をご堪能ください。



### 1 開催内容

- (1) 公演名 第47回尼崎薪能
- (2) 日 時 令和8年5月22日（金）17時30分開演 雨天中止
- (3) 会 場 大物川緑地野外能舞台（尼崎市大物町1丁目18）
- (4) 入場料 無料
- (5) 番 組 尼崎こども能楽教室 仕舞  
仕舞「笠之段（かさのだん）」「松風（まつかぜ）」「船弁慶（ふなべんけい）」ほか  
火入れ式  
能「花月（かげつ）」
- (6) 主 催 （公財）尼崎市文化振興財団・尼崎市・尼崎能楽会
- (7) 協 賛 尼崎ロータリークラブ・（一財）尼信地域振興財団・尼崎文化協会

### 2 問い合わせ先

「第47回尼崎薪能」については下記までお問い合わせください。

（公財）尼崎市文化振興財団 事業課 電話 06-6487-0910 FAX 06-6487-2383

以 上



第47回

尼崎市市制110周年記念

# 尼崎 薪能



能  
花  
月

火入れ式

船弁慶

松風

仕舞  
笠之段

仕舞  
尼崎こども能楽教室

2026年

# 5月22日(金)

## 午後5時30分開始

●雨天の場合は中止

●場所 **大物川緑地野外能舞台**

< 阪神大物駅徒歩5分 >

駐車場はございませんので車でのご来場はご遠慮ください。

[Amagasaki Takiginoh Performance]

“Kagetsu”

Friday, May 22, 2026 5:30p.m-8:30p.m

at Daimotsugawa Ryokuchi Noh Stage  
(1-18, Daimotsucho, Amagasaki Hyogo 660-0823)

Admission Free

It will be canceled in case of rain



●お問い合わせは  
公益財団法人 尼崎市文化振興財団

TEL 06-6487-0910

FAX 06-6487-2383

入  
場  
無  
料

# 尼崎薪能番組

令和八年五月二十二日（金）午後五時三十分始め

尼崎こども能楽教室 仕舞

仕舞

笠之段 吉井 基晴

松風 赤井きよ子

地謡

梅若雄一郎  
藤井丈雄  
山村啓雄  
上野朝彦

船弁慶キリ 梅若 基徳

一管

乱 赤井 啓三

火入れ式

能

## 花

梅若 堯之

月 喜多 雅人

辻 雅之  
清水 皓祐

赤井 要佑

間 善竹 隆司

後見 上野 朝彦  
吉井 基晴

地謡 田中 誠士  
梅若雄一郎 藤井 丈雄  
上野 雄介 上野 雄三  
梅若 基徳

附祝言

## 能【花月】解説

### 【あらすじ】

九州・筑紫の国、英彦山の麓に暮らしていた男が、七歳のわが子を突然失った。天狗に攫われたのか、行方は知れない。嘆き悲しんだ末に出家した男は、わが子への思いを胸の奥に押し込めながら、諸国修行の旅を続けていた。春の盛り、旅の僧がたどり着いたのは京の都、清水寺。門前の男に声をかけると、花月という名の利発な少年が面白い芸を見せると教えられる。現れた少年の花月は、自らの名の由来を弁舌鮮やかに語り、流行りの小歌を謡い、ウグイスに玩具の弓を向けては仏の戒めを思い出し、清水寺の由来を軽やかに謡い舞う。次々と繰り出される芸に、僧の胸にある予感が芽生えはじめる。そしてついに僧は確信する――この少年こそ、あの日生き別れたわが子だと。名乗り出る父、驚き喜ぶ花月。感涙の父子対面を果たした花月は、腰に鞆鼓を打ち鳴らしながら舞いはじめる。天狗に連れ去られた七歳の記憶から、諸国の山々を転々とした日々、芸人として生きてきた歲月まで。辛かった半生を静かに語り終えると、花月は父とともに仏道修行の旅へと歩み出すのだった。

### 【みどころ】

この曲の主演、花月は「芸尽くし物」と呼ばれる演目の中心に据えられた少年です。天狗にさらわれ、数奇な運命を経て芸人となった少年が、舞台の上でその芸のすべてを惜しみなく披露する。能には珍しく、重さよりも軽やかさと華やかさが際立つ一曲です。まず注目したいのは、門前の男（間狂言）との掛け合いです。間狂言は進行役に徹することが多いなか、この曲では間狂言自らが花月に絡み、小歌の相手役を務め、次の芸へと誘います。花月の魅力を最大限に引き出す、まさに名脇役の妙を味わえます。そして後半、父子対面を経て演じられる〔鞆鼓〕の舞。腰に括りつけた小さな両面太鼓を自ら打ちながら舞うこの場面は、喜びと哀愁が入り混じる花月の心そのものを表しているかのようです。諸国の山々――讃岐、伯耆、富士の高嶺――を転々とした少年の記憶が、太鼓の音とともに静かに浮かび上がります。

薪能の炎に揺れる春の夜、少年の芸と父との再会の物語を、どうぞごゆっくりとお楽しみください。